

Title	<Book Review>Klaus Wenk. The Restoration of Thailand under Rama I, 1782-1809. Tuscon : The University of Arizona Press, 1968, xi+149p.
Author(s)	石井, 米雄
Citation	東南アジア研究 (1969), 7(1): 105-105
Issue Date	1969-06
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/55568">http://hdl.handle.net/2433/55568</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

Atsushi Kobata and Mitsugu Matsuda. *Ryukyuan Relations with Korea and South Sea Countries—An Annotated Translation of Documents in the *Rekidai Hoan**. Kyoto: A. Kobata, 1969. xii+215 pp.+153 pp. (plates)

14世紀末から16世紀初めにかけては琉球船の諸国への通交貿易が極めて活発に展開せられ、琉球が日本・朝鮮・中国と東南アジア諸国との間の物資交流の中継国となって非常に繁栄した時期であった。本書はこの時期の琉球と朝鮮および東南アジア8カ国とのそれぞれの関係史について概述するとともに、この問題の研究のための根本史料である歴代宝案中の関係文書の大部分を全文英訳して提示し、かつそれに詳細な注を付したものである。

著者小葉田淳博士（京大名誉教授、本年3月退官）は戦前台北帝国大学（現中華民国国立台湾大学）に在職中から琉球の外交史に大きな関心を持ち、早く『中世南島通交貿易史の研究』（1939）を著すとともに、戦前、沖縄県立図書館に蔵された歴代宝案の原抄本の写本作成にも尽力した。この写本が現在の国立台湾大学所蔵本歴代宝案である。博士は1962年、そのマイクロフィルムを所蔵するハワイ大学東西文化センターに招かれ、歴代宝案の研究に従うことになったが、その際、計画・着手されたのが本書刊行事業であった。本書の原稿は小葉田博士がまず全体の日本文原稿をつくり、それを琉球大学講師の日系米人松田貢氏が英訳して数年前完成されたが、この度小葉田博士の手によりようやく刊行されるに至ったのである。

本書の本文は(1)琉球・朝鮮関係、(2)琉球・シヤム関係、(3)琉球・マラッカ関係、(4)琉球・パレンバン関係、(5)琉球・ジャワ関係、(6)琉球・スマトラ関係、(7)琉球・スンダ=カラパ関係、(8)琉球・パタニ関係、(9)琉球・安南関係の9節から成り、各節には最初に数ページの概説があり、宝案文書の英訳文と注がこれにつづく体裁がとられている。各節に載せられた英訳文書の数は(1)18、(2)37、

(3)19、(4)10、(5)6、(6)3、(7)2、(8)1、(9)1、計97で、関係文書総数127の約2/3に当たり、他はほとんど同文などのため省略されたのであるが、それらの原文は本書末尾の写真版によって見ることができる。宝案文書の訳出に当たり、著者が最も苦心したのは物産名であり、その難解なものについては、古今の諸文献を比較検討するほか、産地の現在の物産を調べ、産地の人に問うなどしてようやくして推定を下したという。それらのうち薔薇露水・香花紅酒・上水花布・密林橋香白酒・好三連打布・別布好咄・山南八好咄・啫哪哩など8種の南方物産については「付録」として詳細な研究を掲げた。

最後に本書の価値を一段高めたものとして末尾に付加された153ページに達する関係文書全部を収める宝案の写真版をあげねばならない。これによって読者は文書の英訳文を原文と対照させて研究しうるばかりでなく、本書を通じて原文書そのものの利用をも可能にしたといえる。本書は標題のいかんにかかわらず、大部分が東南アジア関係の記事によって占められ、かつ訳出掲載された文書は同時代の東南アジア史料の欠を補う貴重なものであり、この意味において本書は東南アジア史研究者にとって必見の書と言えらるであろう。

（藤原利一郎・京都女子大学）

Klaus Wenk. *The restoration of Thailand under Rama I, 1782-1809*. Tuscon: The University of Arizona Press, 1968. xi+149 pp.

本書は、現ラタナコーシン王朝の創始者であるプラプッタヨートフェ王、ラーマI世の時代史である。題名の「タイ国の再興」は、著者が、同王の治世を、1767年にタイの被ったビルマ侵略軍による徹底的破壊からの復興の時代としてとらえたことによる。「王国の一時的破壊は外因によってもたらされた事件であった。もちろんそれは大変災ではあった。にもかかわらず、それはタイ国史の一時代を区切るほどの大変災とは言えない…。国内政治の復興、失われた旧版図の回復などの事業は、アユタヤ時代の内